

第2節 小学校

児童期の発達特性

子どもたちは、幼児期から思春期にかけて、自我を形成し、自らの個性を伸長・開花させながら発達を遂げていく。

小学校の児童は、児童期（あるいは学童期）といわれ、6歳から12歳という心身の成長の著しい時期を学校生活の中で過ごしている。その中で、幼児期後半で形成された自我を発揮しつつ、学年が進むにつれて精神的に安定していく。この時期の児童は、好奇心が旺盛で、積極的に未知のものを探究しようとする。また、自分には課題を遂行する力があるという自信が芽生えはじめ、人格的活力として有能感があらわれてくる。

そして、児童同士の相互干渉の増大とともに、社会性が発達し、交友関係も広まりを見せ、友だちからの賞賛や非難に対する感受性や対応の仕方を身に付けてくる。

つまり、友だちからの受容的肯定的評価をとおして、自己を尊重する態度とともに自己肯定感が培われてくる時期でもある。また、外的・内的世界が確立し、認知的過程等が発達することで、自己コントロール力がはぐくまれてくる時期でもある。

ただし、児童期のこうした発達特性の背景には、人的・物的などを含めた児童を取りまく社会的環境が大きく影響している。

そうした児童期の実態を踏まえ、授業改善を図っていくためには、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感が実感できる授業を展開していくことが、重要な視点になっていると考える。

今日的課題を踏まえた授業改善の視点

小学校においては、児童の発達の過程などを的確にとらえるとともに、各学校及び各学年の児童の特性や課題について十分配慮して、適切な教育を推進していくことが必要となっている。

そうした中で、前述のアンケート結果にある本府の小学校高学年児童の実態から、児童一人一人が主体的・意欲的に学習に取り組める授業改善の視点を考えていく必要がある。

児童が、授業場面において自己を振り返り意欲的に学習に取り組み、学習の達成感、成就感及び充実感を感じとる背景には、教師や友だちとのかかわりが大きく影響していると考えられる。また、授業場面において児童が、自己肯定感を実感し、さらに高めていくためには、教師が児童一人一人の実態を十分に踏まえた上で、創意工夫した授業改善に取り組んでいくことが求められている。そして、児童一人一人が授業に参加しているという気持ちをもつことが、児童の学習への主体性につながるとともに自己肯定感を実感できることにも連動していくと考えられる。

そうした点を踏まえた上で、小学校において児童に「自己コントロール力をはぐくみ、自己肯定感が実感できる力」を培っていくためには、低学年から中学年においてもそれぞれの段階に応じた授業改善の視点を考えていくことが必要となっている。

つまり、小学校において、研究主題の「自己をコントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」を考えていくとき、平成10年の教育課程審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」の中で述べられている以下の視点が大切となっている。。

低学年においては、幼稚園教育における幼児の遊びを中心とした総合的な活動を基盤と

して、集団による教科の系統的な学習に慣れるようにし、生活科を中核とした合科的な指導を推進していくことである。中学年においては、児童の興味・関心等を生かしつつ、日常生活やその後の学習の基礎になる読・書・算などの基礎的・基本的な内容を繰り返し指導することである。高学年においては、読・書・算を中心とした学習を確実に習熟させるとともに、課題選択などの選択的要素を取り入れ、選択能力の基礎を培っていくことである。

こうした児童期の発達及び学習の視点を踏まえて、さらに小学校教育における授業改善を図りつつ、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感が実感できる授業を展開していくことが必要であると考ええる。

また、障害児教育については、京都府の平成14年度の「指導の重点」で次のように述べられている。

障害の状態、発達段階、特性などに応じ、障害に基づく種々の困難の改善・克服を図りながら個性や能力の伸長に努め、心豊かでたくましく生きる力を培う。
また、すべての児童生徒が障害のある人を正しく理解するための指導を計画的に行う。

この中の「個性や能力の伸長に努め、心豊かでたくましく生きる力を培う」という視点の具体化は、まさしく障害児学級において生活をより豊かにしていくとともに、学習の在り方の改善を図っていくものである。特に、小学校の障害児学級において学習の在り方の改善（授業改善）を図っていくことは、障害のある児童に対しても「自己コントロール力をはぐくみ、自己肯定感が実感できる」力を培っていくことにつながっていくと考える。

こうした点を踏まえて、本研究における学習指導事例として、小学校については、「国語科」「図画工作科」「生活単元学習（障害児教育）」を取り上げることにした。

これらの教科等の研究の視点としては、以下のとおりである。

国語科	・言語に関する意識を明確化・具体化し、自己コントロール力をはぐくみ自己肯定感を実感でき、児童一人一人が存在感を感じられる授業
図画工作科	・人間としての豊かな心と心身の調和のとれた発達をうながすための造形的な創造活動の基礎的な能力を身に付けさせる授業
生活単元学習	・障害のある児童の障害の状態、発達段階、特性などのニーズに応じて自立し、社会参加するための基礎となる力の獲得を目指した授業

これらの視点を踏まえて、小学校において「自己をコントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」について考察する。

1 国語科

小学校国語科における方策

「人間の生き方を（マザーテレサ）」

－読書感想文発表会をしよう－ （第5学年）

(1) 小学校国語科の目標や内容とのかかわりと研究の視点

ア 目標とのかかわり

小学校国語科の目標は次のとおりである。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

これらの目標を、自己コントロール力や自己肯定感からとらえると次のように考えられる。

自分の思いや考えを「適切に表現」するためには、それに先だって自分の思いや考えを肯定的にとらえたり、確かな表現方法を身に付け自信をもつことが必要である。

また、同時に他者の思いや考えを「正確に理解する」ためには、「相手意識」を大切に自己をコントロールしながらその意見に耳を傾けたり、示された文章を読んだりする力を培っていくことが求められる。「伝え合う力」はこの両軸をかみあわせ、積み重ねてこそ高まると考える。

この実践研究においては「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動の中で、自己コントロール力と自己肯定感がどのようにはぐくまれるかを考えていきたい。

イ 本單元における領域の目標及び内容とのかかわり

ここでは、本單元で取り扱う第5学年及び第6学年の領域の目標と自己コントロール力及び自己肯定感とのかかわりを、次のようにとらえた。

「話すこと・聞くこと」の目標とのかかわり

自己コントロール力 ... 目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことによって論理的な思考を働かせ自分の考えを深め、相手の意図をつかみながら聞くことによって伝え合う力を育成する。また、計画的に話し合おうとする態度を育てることが粘り強い学習習慣を身に付けることにつながる。

(アンダーラインが「話すこと・聞くこと」の学年目標に関連する部分)

「書くこと」の目標とのかかわり

自己コントロール力 ... 目的や意図に応じ、考えた事などを筋道を立てて文章に書くことによって、自分の思いや考えを論理的に組み立て、効果的に表現しようとすることによって伝えたい内容を的確に表現する。

(アンダーラインが「書くこと」の学年目標に関連する部分)

「読むこと」の目標とのかかわり

自己コントロール力	... <u>目的に応じ、内容や要旨を把握しながら読むことによって、話の論理の展開の仕方を的確にとらえ、自分の読みとり方ができ、意見をもてるようにする。</u>
自己肯定感	... 読むことによって、新しい知識を得たり、既存の知識を深め、 <u>知的好奇心や感動を高め、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。</u>

(アンダーラインが「読むこと」の学年目標に関連する部分)

自己コントロール力と自己肯定感は相互に作用しあい、相互に関連して高まったり、低くなったりするものであると考えられる。また、その度合いは教科の目標達成にも大きく影響していくと思われる。

したがって、小学校国語科の各領域の内容に見るそれぞれの言語能力を育成していくに当たっては、この二つの力を意識的かつ効果的に学習場面に反映させていくことが、今、求められている授業改善につながると考える。

ウ 研究の視点

国語科の授業改善を押し進め基礎・基本を定着させていくためには、国語科本来の指導方法に加え、自己指導能力をはぐくむ視点と自己コントロール力と自己肯定感を育成していくことが重要であると考えられる。授業においては、これらの力を互いに関連させながら取組を進めることによって、児童一人一人の学習への意欲は一層高まり、また、そのことは表現力や理解力を一層高め、深化させ、国語を尊重する態度を育てることに結び付くと考える。

教科独自の指導方法を生かす視点

(言語に関する各意識の明確化・具体化)

学習場面において「目的意識」、「相手意識」、「方法意識」、「場面状況意識」、「評価意識」の五つの意識を一人一人の児童にはっきりもたせることは、学習への関心・意欲を高め、だれもが存在感を感じられるような授業を構築していくためにも重要である。

また、この意識をもつことにより自己肯定感が促進され、同時に自己コントロール力も培われ、その相乗効果の中で、児童一人一人の自己実現はさらに進み、授業改善もさらに進んでいくものと思われる。

ここでいう各意識について大切にしたいことは次のようなものである。

「目的意識」	一人一人の児童が、各単元の目標と学習内容について、なぜ学ぶのか、何を学ぶのかという意識をもつこと。
「相手意識」	自分の考え、学習した内容を誰に向けて発信するのか、また、それを受信する側の立場を考える中で、双方向の交信を育て上げ、互いに学び合うという意識をもつこと。
「方法意識」	単元の目標と内容に応じた学び方を身に付けることによって、自ら自分の学習方法を見つけだしていく意識をもつこと。
「場面状況意識」	どんな場面で言語活動を展開していくのかという意識を自分なりにもつこと。
「評価意識」	学習の過程やまとめの段階において、言語能力がどの程度高まったか、変化したかを確かめながら前進する意識をもつこと。

(児童一人一人が進んで学習に取り組む言語活動の場の設定)

- ・一人一人の児童が目標達成に向けて主体的に学習計画を立てる場を設定する。
- ・単元の目標や内容に即した言語活動<本時-読書感想文発表会->を設定する。
- ・単元全体を通じて自分の生き方を見つめる場を設定する。

(交流の場の設定)

- ・「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の全体にかかわって学習過程における学びの交流は重要である。このことを通じて互いの意見や感想を聞き、質疑応答を重ね、自分の意見を提起していくことは、互いの言語能力を鍛え、伝える力の根元となる。
また、これらの交流を通じて、互いを認め合う精神も生まれ、より確かな自己肯定感をもつことができるようになり、同時に自分の学びや意見を修正したり、批評したりする中で、自己コントロール力も培われていく。

自己指導能力をはぐくむ視点

国語科の目指す目標を達成し、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむための自己指導能力の条件については次のように考える。

子どもに自己存在感を与えること - 役割達成感をもたせる -

- ・学習過程において、「わかった」「できた」と満足できる場面を設定し、充実感をもたせる。
- ・読書感想文発表会をもつにあたってワークシートを活用し、話し手の内容がより適切に聞き手に伝わるように工夫することによって、互いのコミュニケーションを豊かに機能させる。

共感的人間関係をはぐくむこと - 仲間や教師の肯定的態度・共感的理解 -

- ・児童一人一人が自分の思いや考えをのびのびと安心して表現できる開かれた学級経営を行う。
- ・児童の思いや意見の一つ一つについて教師がそれを肯定的に受け止め、励まし、また、よりよいものに近付けるための具体的な言葉かけを行う。
- ・児童が互いに自分の思いや考えを交換し、認め合う交流の場を設ける。

自己決定の場をできるだけ多く与えること - 自己への振り返りを促す -

- ・自ら主体的に取り組んだ学習(課題選択とそれに向けての実践)を通じて得られた結果を静かに振り返り、自らの成長を見つめる場を設定する。

自己コントロールや自己肯定感をはぐくむための様々な手法を取り入れた学習の視点

(開発的カウンセリングの手法)

自己コントロール力と自己肯定感を身に付けさせるためにも開発的カウンセリングの手法を活用することは効果的である。

アサーションは非攻撃的自己主張と要約され、自分の思いを大切にしながらも、相手のことも考えた自己表現の仕方であり、複雑化していく人間関係の中にあつてますます必要とされるソーシャルスキルである。

また、構成的グループ・エンカウンターは自己肯定感を育てる(自分を好きになれる子どもを育てる)、子どもの人間関係の力を育てることを目的とするが、今日の子どもに必要なこの二つの力を意図的、計画的、効果的に育てるために有効な手法である。これ

らの内容の全部、またはその一部を児童の実態に即して意図的に学習過程の中に位置付けることによって様々な効果が得られることが多い。

今回の読書感想文発表会においては、児童相互の心の交流を促進し、学習活動をより深化させることを目的としてアサーションの視点や構成的グループ・エンカウターの手法を「話し方・聞き方」の中で活用した。

【アサーション、構成的グループ・エンカウターの手法を活用した話し方、聞き方、質疑応答の具体例】

話し方	聞き方	質疑応答
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が学んだこと、気付いたことについて照れずに大きな声で話す。 ・なるべくみんなに分かりやすくゆっくりと話す。 ・聞いている人の顔を見ながら話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの話は最後までていねいに聴く。 ・冷やかしたり、ちゃかしたりしない。 ・発表の途中で、内容を否定するようなことを言ったり、態度に現したりしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・よくわからなかった内容については遠慮なく質問する。 ・発表の内容で良かった点を見付け、発表者に伝える。 ・発表が終わったら頑張りを讃えて拍手をする。

これらを巧みに授業の中に取り入れることにより、自己コントロール力及び自己肯定感もまた育成されていくものとする。特に自己肯定感は自己コントロール力が発揮された結果として得られた学習の成果によって感受できるものであり、自己コントロール力は、実感された自己肯定感の度合いに応じて発揮されるものである。したがって、児童の実態に即してこれらのエンカウターの手法等を積極的に活用していくことは、子どもたちの学びと「相手意識」、また、コミュニケーション能力をもうひとまわりレベルアップしていくためにも効果的であるとする。

(2) 単元名と単元設定の理由

ア 単元名 「人間の生き方を(マザーテレサ)」

- 読書感想文発表会をしよう -

イ 単元設定の理由

高学年になるにつれ、それまで「自己意識」が支配的であった子どもたちの心にも、様々なふれあいや葛藤を体験する中で、「相手意識」が強くなり始める。また様々な分野の人々の生き方に関心やあこがれをもったり、それらの人々の生き方を自分と比較しながら考えることができるようになる。

したがって、この時期に優れた図書教材に親しみ、そこから学んだ内容について相互に感想や意見を述べ合うことは、自己理解、他者理解の意識をはぐくむとともに、今回の研究主題に見る「自己をコントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」のテーマに連なると考える。

この単元では伝記という人々の生き方が「凝縮」された図書教材を題材に取り上げた。ここではその読みを通じて共感したこと、不思議に思ったこと、あるいは自分と違う別の

考えや見方にふれさせそれを読書感想文発表会で交流しあうことを通じて、さらに考えを練り上げさせたい。

また、並行して別の伝記にもふれさせ、そこに流れる登場人物の考えや生き方を味合わせ、より幅広いものの見方や考え方を身に付けさせたい。

この一連の取組は、一つの伝記を自ら選択し、読み通したという達成感を味わわせることはもとより、自己の生き方や学び方を肯定的にとらえたり、他者の生き方を共感的にとらえる力を育成することにもつながると考える。

(3) 単元目標

- ア 全文を通読し、様々な人物の伝記を読み広げる学習の見通しをもち、意欲的に学習に取り組もうとする。 (国語への関心・意欲・態度)
- イ 知らせたい内容について相手に分かるように話の組立てを工夫しながら話すとともに、友だちの発表の要点を押さえながら聞く。 (話す・聞く能力)
- ウ 伝記の人物について考えたことを紹介文としてまとめるとともに、自分の考えや目指す生き方について効果的に書く。 (書く能力)
- エ マザー・テレサの心情や生き方、場面などについて優れた叙述を味わいながら読む。「読書の窓」を参考にして伝記を選び、自分の考えを広げたり深めたりしながら読みを進める。 (読む能力)

(4) 単元指導計画 (p.42.43参照)

(5) 本時の目標

- ア 読書感想文発表会に意欲的に取り組み、さらに伝記を読み広げようとする。 (国語への関心・意欲・態度)
- イ 登場人物の考えや思い、生き方について、互いに相手意識を大切にし分かりやすく話したり、伝えようとしていることを聞き取ったりして、ものの見方や考え方を深める。 (話す・聞く能力)

(6) 本時の展開 (p.44参照)

(7) 指導上の工夫

ア 「話すこと・聞くこと」の内容とのかかわり

- ア 考えた事や自分の意図が分かるように話の組み立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。
- イ 話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと。
- ウ 自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

「話すこと・聞くこと」は両輪の関係にあり、この二つの力は低学年からの学習の積み重ねを通じて高まっていくものである。

高学年では自分の願いや思いを相手に正しく伝えるためには、何を話したいのかを明らかにするとともに、どのようにすれば確実に伝えることができるかを考えて話すことが求められる。話す内容の順序を整理し、その組み立てを工夫し、相手や目的に合わせて適切な言葉遣いで話すことが求められる。そして話し手はそのことを一つ一つ具体化し、自分の思いや考えをまとめ、表現することによって、自己を肯定的に見つめる力を身に付け、

(4) 単元指導計画 12時間 (単元名「人間の生き方を(マザーテレサ)」)

時	指導過程と指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己コントロール力をはぐくむ視点 自己肯定感をはぐくむ視点
1	課題把握 ・目的や意図などに応じて文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること。	・全文を通読して様々な人物の伝記を読み広める学習の見通しをもつ。	・読書計画表を用意して自分の見通しをもたせる。 (ワークシート活用) ・伝記を何点か紹介する。 (伝記準備)	・自分の学習の目当てを明確にもとめとする。 (国語への関心・意欲・態度)	読書計画を立てる。
2	課題追究 ・自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な図書資料を選んで読むこと。	・様々な人物の伝記を読み、人間の生き方について考える。 ・朝学習や家庭学習等で並行読書を進める。 (1週間程度)	・読書計画表と伝記を準備し、多くの本の中から自分で伝記を選択できるようにする。 (読書計画表、伝記準備)	・自分の読みたい本を探して集中して読む。(読む能力)	根気よく本を読み進める。
4	課題設定と課題追究 ・登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと。 ・書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらか読むこと。	・テレサが貧しい人たちのために行ったことや、テレサの言葉に表れている考えや願いを読みとり、テレサの生き方について考える。	・各自、教材を読んでとらえたテレサの人物像をイメージしつつ、ことばや文に注意してテレサの心を考えさせる。 ・これまでの学習をもとに「貧しい人は美しい。」の言葉に込められたテレサの心を考えさせる。 (読みとりワークシート活用)	・テレサが貧しい人たちのために行ったことをまとめる。 (読む能力) ・テレサの言葉を書き出す。 (書く能力) ・テレサの言葉に表れているテレサの考えを読みとる。 (読む能力) ・読みとったことをもとに、テレサの生き方について考えたことを書く。 (書く能力)	読みとったことを交流するなかで、友だちの意見を聞き、自他の考えを比べて違いを発見する。 言葉や文に着目してじっくり読みとる姿勢をもつ。

	指導過程と指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己コントロール力をはぐくむ視点 自己肯定感を育む視点
2	交流と課題設定（本時） ・考えた事や自分の意図が分かるように話の組立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。 ・話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと。	・読んだ本を紹介し合う。 ・読んでみたい伝記を決める。	・読んだ本の簡単な紹介文をもとに、知らせたい内容や自分の考えを、分かりやすく話させる。 ・ブックリストを用意して読みたくなった本の題名にチェックを入れながら紹介を聞かせる。 （児童自作ブックリスト）	・友だちが読んだ人物の生き方や、それに対する考えを理解し、さらに伝記を読み広げる意欲をもつことができる。 （国語への関心・意欲・態度） ・紹介したい伝記の内容や自分の考えを分かりやすく発表する。 （話す・聞く能力） ・友だちの発表を相手意識をもって大事なことを落とさないように聞く。 （話す・聞く能力）	ブックトークを通して自分の伝えたいことが伝達できる喜びを味わう。 友だちの紹介を聞き、新たな課題（本）を自己決定する。 根気よく、集中して友達の紹介を聞く。
1	課題追究 ・自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な図書資料を選んで読むこと。 ・書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらか読むこと。	・紹介し合った本の中から、さらに一冊を決めて読み進める。 ・朝学習や家庭学習等で並行読書を進める。 （1週間程度）	・興味をもった点、感心させられた点、考えさせられた点等に付箋をつけながら読ませる。 ・本を変更したい場合は認める。	・人物の生き方に興味をもって進んで読むことができる。 （読む能力） ・選んだ本を計画的に読み進める。 （国語への関心・意欲・態度）	自分の生き方と照らし合わせながら伝記の人物の生き方を楽しむ。 根気よく、計画的に読書を進める。
1	課題追究 ・目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書くこと。	・各自「自分の生き方」を考える。 ・各自、自分の考えを文章にまとめる。	・観点を示して、観点に沿って書きたい事柄を整理するよう助言する。 （ワークシート、作文用紙活用）	・「自分の目指す生き方」を文章に表すことができる。 （書く能力）	自分の生き方を振り返り、未来を前向きに考える。 伝記の人物の生き方を参考に、自分の生き方を考える。
1	交流、深化、内省 ・書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらか読むこと。	・書いた作文を読み合う。 ・感想を交流し、単元のまとめをする。	・友だちの目指す生き方のどんなところに考えさせられたか、それはなぜかを考えさせる。 （交流、感想用紙活用）	・友だちの書いた作文を読んで自分の生き方について考えを深めることができる。 （国語への関心・意欲・態度）	自分の考えを友だちと分かち合い、認め合う。 友だちの生き方への考え方を読み取ろうとする。

(6) 本時の展開

指導過程	指導内容	指導形態	主な学習活動	指導上の留意点	教材・教具等	評価
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習を振り返る。 本時の学習課題を把握する。 	<p>一斉</p> <p>一斉</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習を思い出す。 本時の学習の課題をつかむ。 <p>おすすめの人物とその生き方を紹介し合おう！</p>	<ul style="list-style-type: none"> 読書感想文発表会で紹介し合う内容を確認する。 自分の考えを交流し合う意義を話す。 	ブックリスト	<ul style="list-style-type: none"> 意欲的に学習課題に取り組もうとする。(国語への関心・意欲・態度)【観察】
深める	<ul style="list-style-type: none"> 読書感想文発表会をする。 次に読んでみたい伝記を決める。 	<p>一斉</p> <p>個別</p>	<ul style="list-style-type: none"> 司会が司会進行をする。 プログラムに沿って発表会を行う。 発表者は、おすすめ的人物について話す。 聞き手は、自分の考えをもちながら聞く。 質問や感想を交流し合う。 紹介した興味をもった読書を、興味をもった人に紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が考えを十分に伝え合うことができるように事前の原稿の準備段階で指導をする。 読書計画表を聞き手メモとしても活用し、感じたことを書き加えるようにする。 友だちの発表を集中して聞くことができるように指導する。 自分の考えと友だちの考えを比べながら聞くようにする。 興味をもった本は何冊でもマークを入れてよいことを知らせる。 実際に読んでみたい本を手にとり、実際に読んでみたい伝記を見つけてみる。 	<p>発表原稿</p> <p>紹介する伝記の本</p> <p>ワークシート</p> <p>読書計画表(感想欄)</p> <p>伝記コーナーの本150冊</p>	<ul style="list-style-type: none"> 友だちが選んだ人物の生き方や、それに対する友だちの考えを理解し、意欲をもつ。(国語への関心・意欲・態度)【観察】【ワークシート】 人物の生き方について考えたことと理由や論拠を明らかにして話す。(話す・聞く能力)【観察】 友だちが話す人物の生き方や感想に対して、自分の考えをもちながら聞く。(話す・聞く能力)【読書計画表】
まとめる	<ul style="list-style-type: none"> 今日の学習を振り返る。 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価をする。 次時の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 読書計画表の感想欄で今日の学習を振り返り、自分の感想に気付かせる。 次時の学習課題を確認し、また、今後の学習の見通しを確認させる。 	読書計画表(感想欄)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをまとめ、自己評価する。(国語への関心・意欲・態度)【読書計画表】【ワークシート】

同時に相手に伝える喜びを実感することができると考えられる。

また、聞き手は、発表者が何を伝えようとしているのかに関心をもって聞くとともに、聞き方もそれ以上に大切になってくる。例えば相づちをうちながら聞く、うなずきながら聞く、メモを取りながら聞くといったことは、話し手とのコミュニケーションを高めていくためにも大切なことである。そのことを通じて話し手、聞き手ともに相手意識が育ち、同時に自己をコントロールする力や自己肯定感も育っていくものと考えられる。

したがって、その力を高めるためにはまず学級の中に安定した人間関係を築き上げ、その上に立って、年間計画、週案の中に授業改善の具体的な方途を盛り込むことが重要である。

次にこの力を高めるための話し合い活動においては、次のようなことを意識して取組を進める必要がある。

話し手は自分の意図が相手に分かるように話を組み立て、順序を整理し、目的に応じた資料（写真・絵画・グラフ・表・模型など）を事前に準備することが求められる。話す内容とそれらに関連させて提示し、互いの意見の共通点や違いが具体的に見えるようにすることは、互いを理解しあうためにも重要である。

聞き手も話し手の意図するところを考えながら聞くことが大切である。言葉を換えれば、どちらも「相手意識」をもって話し、聞く力が育成されてこそ、国語科の目指す「伝え合う力」は育成されていく。豊かな話し合い活動はこれらの達成の度合いに比例して深化していくものと考えられる。

また、話し合い活動においては、計画的に話し合う態度を育成していくことも重要である。より活気にあふれ魅力的な活動にするためには、問題解決への見通しをもち、互いの意見を共通理解し、そこから新たな考えや方向性を見いだしていくという取組が望まれる。

加えてこの力は、教科で身に付けた力をもとに朝の会、学級活動等の場面など、学校生活のあらゆる場面で育成していくことが求められる。

工夫のポイント

本年度はこれらの点を踏まえながら次のような取組を継続して行ってきた。

例えば朝の会での新聞記事を活用した発表、また担任による「読み聞かせ活動」がそれに当たる。特に後者では児童の興味・関心に沿う形で児童自らが選択した本を「読み聞かせ」し、児童の「もっと知りたい」という意欲につながるように工夫した。

本単元ではそれらの事前学習の上に立って最初に次のページの〈表1〉のような読書感想文発表会までの流れを知らせる中で、学習の見通しをもたせた。

次に児童一人一人に次ページの〈表2〉のような読書計画表の作成を行わせた。これは現在の自分の興味・関心を自覚させ、読み進む中で後から「どれくらいの本を読んだか」（達成の度合い）「どのようなジャンルの本を選択しているか」を実感させるためである。

このことは自分の読書傾向や感動の蓄積を目に見える形で知ることを通じて自己肯定感を実感でき、また、その後の読書への励みにもなる。

次に話し合い活動においては、より一層話し手の意図を正確に聞き手に伝える工夫が必要になってくる。したがって、話し手は伝えたい内容を明確にすること、順序を整理すること、またさらに話す内容をわかりやすくするための資料（写真、絵画、表、グラフ、模型等）を事前に準備し、話とそれらに関連させながら、自分の思いや意見、感想を伝えていくことが求められる。互いの意見の共通点や違いが具体的に見えるようにすることは、互いを理解し合うためにも重要である。

加えて、話し合い活動においては計画的に話し合う態度を育成していくことも重要であ

る。見通しをもち、共通理解し、問題解決の方法を探り、そしてそこから新たな考えや方向性を見いだしていくためにも、魅力ある話し合い活動を作り上げていくことは必要であると考え。

<表1>

読書感想文発表会 までの流れ	
共通読書	並行読書
マザーテレサを読む。	興味・関心のもてる伝記を選択して読む。
テーマを決めて読んだり、関連のある本を選んだりする。	
紹介したい本を決める。	
効果的な紹介の仕方を考える。 ・この本を選んだ理由 ・感動した場面や言葉 ・自分の考えなど	
発表のための原稿、資料などを整える。	
読書感想文発表会(本時)	
課題追究 ・発表会を通じて興味・関心をいただいた作品	
単元のまとめ ・感想文の交流 (友だちと感想を交流しあい、仲間の意見や自分の生き方を見つめる。)	

<表2>

読書計画表 5年1組 氏名()				
期日	学習活動	並行読書		聞き手の感想など
	マザーテレサを読む	本の題名	紹介したい内容	印象に残ったことなど
		ヘレンケラー	・感動したこと ・感動した部分 (ページ・行)	
		徳川家康	・(時代背景を現代と対比させながら読み取る)	
		イチロー	・(同じ時代を生きるものとして感動を共有する。)	

イ 「書くこと」の内容とのかかわり

<p>ア 目的や意図に応じて、自分の考えを効果的に書くこと。</p> <p>イ 全体を見通して、書く必要のある事柄を整理すること。</p> <p>ウ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の組立ての効果を考えること。</p> <p>エ 事象と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。</p> <p>オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。</p>

国語科の「書くこと」については、発達段階を踏まえながら、自分の考えや思いが相手や目的、意図に応じて正確に伝わるように語、文、段落等の構成を工夫して書く能力や適切に表現しようとする態度の育成が重視されている。

本単元では読書計画表の作成やワークシートを活用しての発表会を計画した。

児童は、読み取った内容や自分の意見や思い、友だちに薦めたいことなどを「書く」という言語活動をすることによって、より確かなものにした。このことは、読み取った内容と自分の考えを照らし合わせながら自分の考えを発展的に組み立てるためにも重要である。

本年度は年間を通じて自分の思いや考えを綴る中で書く力を高め、同時に自分の生き方を見つめる目的をもって生活日記を書く取組を継続してきた。また、夏休みにおいては、

自分自身がどれくらい読書に親しめたか目に見える形で確認するため、ブックリストの作成を行った。これは本単元の読書計画表にもつながるものである。

この取組は、言語事項の内容を日常生活の中に実践的に取り入れていくためにも意識して継続した。

工夫のポイント

これらの取組を受けて、本単元では読みとりワークシートを活用した授業実践を展開した。

この実践は発表者自身が読み取った内容を整理し、感想や考えをまとめることを通じて、自分の思いをより確かなものにつながり、聞き手にもよりわかりやすく伝える手だてとなる。

また、発表者は自信をもって発表に臨むことができ、聞き手もそれを受けて、よりの確かな質問や意見を返すことができる点でも効果的である。そして、このことは両者にとって自己を肯定的に見つめ、コントロールする力を向上させるためにも有効である。

読みとりワークシートに書き込む内容の例	
(第1段階)	<ul style="list-style-type: none">・タイトル「この人の生き方を紹介します！」・選択した本の名前・人物の名前・選んだ理由・全体の感想・共感したこと（自分の思いや考えをまとめる。）・自分との共通点や違い・ここがおすすめ！（ページ・・・発表会でその部分を読む。）
(第2段階)	<ul style="list-style-type: none">・もっと深く知りたい人のために・・・（関連する図書の紹介）・意見を聴いて思ったこと（「意見交流」を踏まえて）

ウ 「読むこと」の内容とのかかわり

- ア 自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な図書資料を選んで読むこと。
- イ 目的や意図に応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること。
- ウ 登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと。
- エ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらか読むこと。

国語科の「読むこと」については、高学年では文章の種類や読む目的に応じて、書き手の述べたい内容や述べ方を正しくとらえる力を育てることが目標となる。また幅広いジャンルの本を読むことによって、新しい知識を得、既存の知識を深め、知的好奇心や感動を高めることは、それらの力を背景として自分の在り方や生き方を確かなものとしていくためにも欠くことのできない力となる。

読書活動を充実させるためにはまず本との「出会い」を大切にしたい。

したがって、本年度はこれまで「読むこと」の能力を育てるために意図的に読書環境の充実を図った。教室にはあらゆるジャンルで活躍した人物の伝記を取りそろえ、児童がその中から自らの興味・関心に応じて選択できるようにした。

また、共感に関心・意欲に相通じる。そのため伝記をそろえるにあたっては、同じジャンルのものを複数設置するとともに、現在活躍している人物にもスポットをあて、児童が同時代を生きる登場人物と一体感を味わいながら読書に取り組めるように工夫した。

工夫のポイント

本単元では、より深い読みを実現するため、次のような取組を行った。

「年表や地図の活用」

- ・「現在・過去・未来」を一つの流れの中でとらえ、その伝記に登場する人物の生きた時代や場所、またその当時の「時代背景」を考え合わせながら登場人物の生き方に迫らせるよう試みた。このことはさらに未来に向かって生きる自分の生き方を見つめさせるためにも有効である。

(8) 児童の変容

ア 第1回研究授業

教室全体に伸び伸びとした雰囲気、児童と指導者の間にも常日頃から良い人間関係が築かれてきている様子が見えられた。

読書環境も年間を通して整えられ、児童はいつでも本に親しめるよう工夫がなされていた。また、読み聞かせの成果として、本に対する興味・関心も非常に高い。

したがってこれらを背景として、新たな「伝記」というジャンルの学習に対しても大変スムーズに入り込むことができ、今後の学習への期待感が感じられた。

イ 第2回研究授業(本時)

今回の授業に際しては次の表に見るように、三点の項目について、事前と事後にアンケートを実施した。

【児童アンケート】

アンケート項目(26人)	選択肢	事前	事後	増減
本は好きですか。	好き	9	11	
	ふつう	14	14	-
	きらい	3	1	
伝記は好きですか。	好き	8	8	-
	ふつう	13	16	
	きらい	5	2	
自分の生き方について考えたことがありますか。 (重複回答)	普段の生活		10	
	将来の夢		19	
	職業		7	

結果は、今回の取組を通じてさらに読書を好む児童が増える傾向にあることを示した。

また、自己を見つめる項目では重複回答となっているが、自分の普段の生活を振り返ると同時に、将来や夢を見つめようとしている児童もかなりの数に上る。このことは今回の読書感想文の発表会が児童の内面を見つめるよいきっかけとなったことを示していると思われる。

発表会においては、児童は自ら選択した伝記について、その本を選んだ理由や紹介したい場面やエピソードをまとめ、その原稿をもとに発表を行った。

その内容はぜひこの本の面白さや感動を伝えたいという気持ちを反映して、伝えたい場面や言葉が具体的に盛り込まれ、自分と主人公の共通点、相違点についてもよく見つめられていた。このことは第2章の設問26「意見を言うときには、自分の考えをしっかりとめてから発言する方ですか」の問いかけに対しておよそ60%の児童が「そうである」「だいたいそうである」と答えていることとも共通する。加えて聞き手である児童も相手意識を大切に発表をしっかりと聞き取り、「なぜその本を選んだのか」、「一番感動した部分はど

こか」といったことについて積極的に質問を投げかけることができた。

また、児童は本との対話を通じて、共感する部分では自己肯定感を味わい、作者の考えを学び自分の考えを修正する場面では自分をコントロールする力を身に付けている様子がよくうかがえた。このことは、今回の読書活動が常に自己との対話の中で進められた証左であると考えられる。なかには伝記の人物と自分の夢を重ね合わせてとらえられている児童も見られた。

また、第2章の設問6「あなたは、授業中、できたという喜びを味わったことがありますか」では、「よくある」「ある」と答えた児童がおよそ78%見られた。今回の読書感想文発表会でも、児童の様子にその傾向は見られた。

このことは、児童に主体的な学びの方法を身に付けさせ、また、自己コントロール力及び自己肯定感を育成することが、さらに基礎・基本を身に付けさせるための方途になることを示していると考えられる。

ウ ワークシートの活用と交流会の感想から

(ラインは自己コントロール力、ラインは自己肯定感を表していると考えられる部分)

ワークシートの活用	* 感想 1
国語で伝記のげんこうで、 <u>自分と比べて書いた</u> ことをみんなに発表することが、 <u>自分のことを知ってもらおうようで楽しかった。</u>	

作文交流会の感想から	* 感想 2
ヘレンケラーについて書いた人の作文について <u>みんな同じ本を読んでいてもちがうことが書いてあっておもしろかった。</u> ヘレンがどれだけがんばっていたかがよくわかった。	

作文	「私とヘレンケラー」	* 感想 3
私は、「ヘレン・ケラー」と「アンネ・フランク」と「田中正造」の伝記を読みました。読書感想文発表会にはその中から、「ヘレン・ケラー」を選びました。 <u>選んだ理由はヘレンがなぜ有名だったか知りたかったからです。</u> ヘレンは1880年、アメリカ合衆国、アラバマ州のタスカンビアに生まれました。満一才ころまでは目も見え、耳も聞こえ、口もきけたけれど、ある病気にかかり、それから、目も見えず、耳も聞こえず、口もきけなくなってしまいました。 しかし、ヘレンはくじけたりはしませんでした。1887年、サリバン先生が家庭教師としてやってきました。七才になったヘレンはそれから先生といっしょに三重苦をこく服していきました。 私はヘレンの伝記を読んで、「 <u>根というものは自分の咲かせた美しい花を、決して見ることができない運命にあるのです。</u> 」という文に心を打たれました。心を打たれた理由は根は、自分が一生けん命咲かせたとしてもきれいな花をぜったい見られないのにみんなの知らない土の中で努力をしているということがわかったからです。 <u>ここがこの本のおすすめの文です。</u>		

児童は今回の伝記を教材に用いた学習を通じて、感想1に見られるように、ワークシートの活用の面では、「自分のことを知ってもらおうようで楽しかった」と述べ、非常に自己肯定感を感じていることがよく分かる。

また、感想2では、共通の同じ本を読む中でも、互いにそれぞれ違う読みとり方をして

いることに気が付いた。このことは本時のめあてである互いに相手意識を大切に、話したり、聴いたりして、自己の心をコントロールしながらものの見方や考え方を深めた結果であると思われる。

続く感想3においては、主人公の生き方についてどの部分に共感したかを具体的に記し「ここがこの本のおすすめの文です。」と述べている。このことも読者の児童が主人公に共感し、自己肯定感を感じていることの現れであると思われる。

このように児童はこの単元の学習を通じて、自ら選択した本の内容に自分の姿を投影させながら読みを進め、その姿に共感しながら自己肯定感を高めるとともに、自己をコントロールする力も身に付けたように思われる。

(9) まとめ（成果と課題）

これまで伝記教材「マザーテレサ」と並行読書を通して「自己コントロール力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」について考察してきた。この取組を通じて見えてきたことは次のようなことである。

自己コントロール力について

発表会に向けての過程では、各自に「話す力・聞く力」を高めるためにワークシートを活用させた。

このことは児童一人一人が、自分の伝えたい内容を順序立てて整理する有効な手だてであり、同時に国語科が、「伝え合う力」の育成とともに目指す論理的思考力を向上させるためにも有効であったと考える。また、聞き手により分かりやすく伝えるという目的にも合致し、相手意識の育成にもつながったと考える。

発表会においては、発表者はこれらの点を踏まえて、伝記の主人公について共感した点、自分の考えとの相違点、これから読みたい本などについて発表した。同時に相手の発表に耳を傾け、自分の考えを修正し深化した。

自己肯定感について

今回の学習では共通教材として「マザーテレサ」を読み、並行読書として自らの興味・関心にしたがって読みたい本を自ら選択して読み進めた。このように共通教材のほかに、自らの選択による教材を用いたことは、児童に積極性を育て、そのまま自己肯定感を実感することにつながったと思われる。また本時の目標を達成するためにも大きな力となった。

以上、自己コントロール力と自己肯定感を育成する学習活動の視点と実際について述べてきた。しかし、前述したようにこれら別々に存在するものではない。自己コントロール力は自己肯定感が発揮された結果として得られた成果と共に感受できるものであり、また、自己コントロール力はその自己肯定感によって支えられてこそさらに一段高い学び合いをはぐくんでいくのである。

したがって、この二つの力を授業の中で意識的にはぐくみ、機能させていくことは、今後、国語科の基礎・基本を確実に身に付けさせるための授業改善を押し進めるためにも重要な視点となっていくと思われる。